

チベット文字

星 泉

チベット文字は、7世紀にチベット（吐蕃）を統一した王ソンツェンガンボの時代にその基礎が確立しました。チベットの伝承では、ソンツェンガンボ王は、チベットの政治的、社会的、文化的な発展を目指すためには国として固有の文字を持つことが重要であると考え、トンミサンポータら16名の若者をインドに派遣しました。トンミサンポータはインドの種々の学問と文字について学んで帰国し、当時北インドで使われていた文字をもとに、チベット文字の字形を定めたと言われています。また、彼はチベット語を音声学的に研究した上で、当時のチベット語の発音に見合った正書法の規則を作りました。この正書法の規則は、2つの書物にまとめられており、現在も伝統的なチベット語学習の基本の書として使い続けられています。

最も古いチベット文字は、8世紀に建てられたという石碑に刻まれた文字に遡ることができます。またチベット文字による印刷物では、木版で印刷された経典類が有名ですが、チベット文字による印刷が始まるのは15世紀に入ってからのことです。17世紀から18世紀にかけては、チベット各地に設立された印経院（経典類の印刷所）で大蔵経が次々と開版され、印刷が盛んに行われるようになります。しかし、20世紀後半になると活版印刷が導入され、さらに1990年代に入ってコンピュータによる編集、組み版、印刷が広がると、チベット文化を支え続けてきた木版印刷も、印刷文化の中心からは退いていきます。

チベットには書の伝統があり、書体も様々なものがあります。書には竹ペンが使われます。書体に合わせてペン先を削り、角度や細さを調節します。代表的な書体としては、楷書体にあたるウチェン、草書体にあたるウメーの2種類が挙げられます。ウチェンは木版の文字や活字のもととなった文字で、現在の出版物のほとんどはウチェンで印刷されています。一方ウメーはかつてチベット政府の公文書に使用されていた文字で、手書きになじむ書体であるため、一般には手紙やメモを書くときなどに用いられています。手書き文字の使用には地域差もあり、アムド地方ではウチェン、ラサ周辺ではウメーが主に用いられます。

チベット文字はチベット自治区をはじめ、青海省、甘粛省、四川省、雲南省の一部に住むチベット人によって、チベット語を表すのに用いられています。また、インド北部に拠点をもつチベット亡命政府と亡命チベット人社会でも、チベット文字による教育、出版活動が盛んに行われています。チベット語以外の言語では、ブータン王国のゾンカ語やインドのラダック地方のラダック語等を表すのにも用いられています。

ここに挙げたのはチベット語で祝福や挨拶の場面で用いられることばを、チベット文字のウチェン書体で書き表したものです。

བཀྲ་ཤིས་བདེ་ལེགས། (タシデレ)

文字列の後に附された点は音節の区切りを表しています。最初の文字列は「タ」という音節に対応し、順に「シ」「デ」「レ」と対応しています。チベット文字は基本的に30の子音字と4つの母音字からなりますが、子音字を前後左右に組み合わせることによって、数多くの合成文字を作ります。ここに挙げた「タシデレ」のいずれの音節も合成文字となっています。

[参考文献]

- 星実千代『エクスプレス・チベット語』、白水社、1990.
- 星実千代・星泉「チベット語」『世界の言語ガイドブック2：アジア・アフリカ地域』、三省堂、pp.133 - 152, 1998.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社2001, pp. 180-181 より転載)